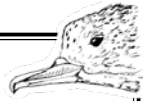


あつちし



第 104 号

2020 年 6 月
日本野鳥の会三重 <http://miebird.org/>



佐佐木信綱の「夏は来ぬ」の歌詞にあるように、この会報が届く頃は麦も稔り、ホトトギスが鳴き、初夏の清々しい季節なはずである。

ところが今、コロナウイルスへの対応で残念ながら、我々も探鳥会をすべて中止している。そもそも探鳥会は野鳥を見ることと、会員相互の交歓を兼ねた催しで、中西悟堂が1934年6月2日から3日に富士の裾野須走で開いたが最初であり、以降、野鳥の会の中心行事として続いてきた。

しかし、当会の活動は探鳥会だけではない。一人で鳥を見る人、野鳥を撮影する人も多い。また、鳥の記録を取る人もある。これら一人での野外活動はなんら、人との接触、接近を前提としない。野外の空気が部分的であれ、高濃度のウイルスに汚染されているという可能性は野球観戦やある種

のスポーツ競技などの場合を別としてほとんどない。したがってウイルスの感染の可能性は極めて低い。外出自粛と言われているが、外出イコール人との接触である都市部とは違い、我々のホームグラウンドである三重では人と接触、接近しない外出方法はいくらでもある。歩いて、自転車で、自家用車で。これを機会に一人で鳥を見る楽しみを膨らませてみよう。

探鳥会では参加者の多数が楽しめるよう、1羽の鳥をじっくり見るということはなかなかできない。また、識別の疑問点も解消されずに終わることもある。一人で見る鳥はまた、違った楽しさができるであろう。識別に自信のない人はこれを機会に図鑑を見ながら、似たように見える鳥とどこが違うのかじっくり見てみよう。特にシギ・チドリはだめ、という人もベテランの会員の中にすらい多い。自分で図鑑を見ながら、覚えた鳥は絶対に忘れない。探鳥会で人から識別を教えてもらって

目次

野にいでよ、野にいでよ	2
表紙の言葉	2
カムチャツカ西岸の動物相	3
ヒレンジャクの当たり年	4
レンジャクの飛来	5
オオミズナギドリの思い出	6
私の大事な経ヶ峰	8
経ヶ峰風力発電所建設計画の変更	9
木曾岬干拓地、チュウヒモニタリング調査 についての抗議	9
私の野鳥ノートから	10
事務局だより	11
舩倉島など離島への渡航自粛	11
シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化 一連載第20回 ヒバリシギ、ヒメウズラシギ	12
理事会報告	16
日本野鳥の会三重 2020年 総会	17
日本野鳥の会 三重 令和2年度 予算書(案)	19
野鳥記録	20
探鳥会予告 7月-9月	24
探鳥会報告 (2020年1月~2020年4月)	25
編集後記	28

当会で予定している7月および8月の探鳥会は中止にいたします。詳しくは24ページをごらんください。

表紙の言葉

ツバメ

松阪市 中村 真理子

3月、毎年店先に子育てに来るツバメの到着が楽しみだ。先に到着した雄が古巣を毎日確認しに来る。その後しばらくして雌が到着。中古物件の補修工事が終わったらいよいよ始まる。このわずかな期間は仕事場の音楽を止め、日に日に賑やかになっていくヒナたちの声がBGM。

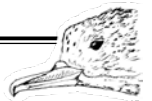
今年はどんなドラマが繰り広げられるのだろう。大家はせっせと掃除をし、時にカラスを追い回し、かわいいお客様の子育てを見守る。

も、すぐ忘れるのが常である。また、早朝に鳥を見ることも面白い。探鳥会の多くは10時開始の設定であるが、鳥を見るには早い方がずっとよい。夜明け頃から出かけるのもよい。空が白々と夜が明ける頃、山手ではクロツグミが鳴き始める。谷間ではミソサザイが長いトリルを聞かせる。また、テーマを決めて鳥を調べるのもよい。同じコースを歩いて、季節の移り変わりでのどのように鳥が変化するのか。また、ウグイスのさえずりは何か所で聞かれるのか？色々なテーマが考えられる。

いかに一人で行動するといっても、公園など人出の多い場所は避けるべきであるし、偶然会った人と会話するにしても必要な距離を話して付き合うべきであるし、マスクを携帯することも必要であろう。

人類は今回のコロナのような疫病を幾度か乗り越えてきた。ヨーロッパでは度重なるペストの被害を受けた。とくに14世紀の黒死病ではヨーロッパの人口の20%が失われたという。今回のコロナウイルスが最終的に人類にどのような被害をもたらすのか、まだ分からない。しかし、自然を楽しむ、というのは人間の本性に基づくものであろう。我々も野鳥を見る楽しみを忘れないでいよう。

カムチャツカ西岸の動物相



ロシア天然資源環境省 全ロシア環境保護研究所 上級研究員
ドミトリー・ドロフィーエフ
Dmitry Dorofeev Дмитрий Дорощеев

ハイリューソヴァ川の河口には様々なシギ・チドリの他に、オオワシ、ハヤブサ、チゴハヤブサもいる。また、スズメ目の小鳥は少ないが、8月の初めからの渡りの時期にはホオジロ類が多くなる。我々の調査用キャンプ周囲のツンドラのような場所ではクロトウゾクカモメ、アジサシ、コシジロアジサシが繁殖している。ベロゴロヴァヤ川に沿った場所ではカモ類が繁殖している。マガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ウミアイサ、ヒシクイ、など。2018年から2019年にかけて我々は10羽のヒシクイに首輪を付けた。そのうち、いくつかは日本と韓国で発見され、報告されている。我々は黄色い首輪を付けていたが、2020年からは白い首輪にした。

この両川ではいくつかのサケ科の魚が遡上し産卵する。最も多いのはサケとカラフトマスである。しかしその他にも多くのベニザケ、ギンザケ、マスノスケ（キングサーモン）、サクラマスも産卵する。地元の漁師はしばしば Arctic Char（イワナの類）、



シロイルカ

アメマスを捕獲する。近くの海には King Crab（タラバガニの仲間）がいる。

サケ類がたくさんいるので当然哺乳類も引き寄せられる。満潮時にはシロイルカが河口でたくさん見られる。アゴヒゲアザラシ、ゴマフアザラシは極めて普通である。魚が多いので当然ヒグマも引き寄せられるので、我々のキャンプは電気柵で守られている。

訳 平井正志

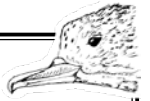
（前号「しろちどり」103号の記事の続きです。誌面の都合で前号に入りきりませんでした。）

おわび：前号「しろちどり」103号 5ページのミヤコドリの写真の撮影者は田中富夫さんでした。編集部の不手際をおわび申し上げます。



ホウロクシギ

ヒレンジャクの当たり年



いなべ市 鈴木 健真

今冬はヒレンジャクの大当たり年で、あちこちから観察情報が聞かれました。私も愛知県内一か所、三重県内6か所で観察することができました。

私はレンジャクの渡りについてある疑問がわきました。それは、このレンジャクたちは、どうやって越冬地を決定しているのかということです。ある説としてレンジャクは、日本海側で大雪が降る年はこちらにやってくるというのがよく聞かれます。しかし、今冬は暖冬で日本海側は記録的な少雪になったはずです。つまり、上記の説に今年は当てはまらなかったこととなります。

ますます謎が深まったレンジャクの渡りでした。

ヒレンジャクの好物

野鳥好きにとって「ヒレンジャクといえばヤドリギ。ヤドリギといえばヒレンジャク。」と皆さんがこんな感じではないでしょうか。ところが最近、そんな当たり前が変わっている？ そんな話題です。

前述の三重県内6か所の観察では、一度もヤ

ドリギを食べている姿を観察できませんでした。それどころか目の前にヤドリギがあるのに、クロガネモチやキヅタの実を食べている姿まで観察しました。これには、いろいろな要因が考えられるかと思えます。

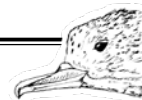
昨今冬鳥がこのあたりに渡ってくる数が少なくなったのではと耳にします。そのことから、餌となる木の実があちこちに豊富にありヤドリギを食べる必要がなくなったのでは無いかという説が一つあるのかと考えました。いずれにせよ、目の前にヤドリギがあるのに他の実を食べているヒレンジャクはヤドリギがそこまで好きではなかったのかも、そんなことを思うのでした。

しかし、他所では今冬もヤドリギを食べているヒレンジャクの姿が多数観察されています。私の運が悪く、たまたまヤドリギを食べているところを観察できなかつただけかもしれません。ああだこうだ野鳥について考えると楽しいです。

皆さんはこのレンジャクとヤドリギの関係についてどう思われますか？



電線の上で休むヒレンジャクの群れ



冬鳥を観察する者にとって、レンジャクは見てみたい鳥のひとつです。しかし、ルリビタキやベニマシコと違い、毎年のように飛来することはなく数年置きにしか見られません。ですが、飛来すると目撃例が頻繁に報告されます。前は2018年2月に多く観察されました。今回は2020年初めに知り合いから河川敷の公園に来ているよと連絡をうけ、その後あちこちで目撃情報が入って来て、この冬はレンジャク観察の当たり年となりました。

団地の公園

3月8日夕方、近くに住む会員の方から、近所の公園にレンジャクがいるよと連絡がありました。そこはよく通りますが、木の実が豊富にある様なところではありません。見に行くとポプラの上に30羽ほどの群れがとまっていたのですが、その日は暗くなってきたので観察は諦めて帰りました。ここは餌になる様な木が無いと思ったので、ねぐらにするために立ち寄ったのだらうと推測しました。翌朝、会員の方がさらに増えていると連絡をくれて見に行くと公園の柳の新芽を食べるレンジャクが50羽以上いました。木の新芽も食べるのかと思って見ていると、前日の大雨から一転、雲ひとつない天気となり気温が上昇して周囲に虫が飛び交い始めました。するとレンジャクは高木へ上って行きフライングキャッチを何度も繰り返していました。そして、予想通り柳の新芽では物足りなかったようで、翌日には姿が見えなくなりました。



ポプラの新芽を食べるキレンジャク

伊坂ダム

伊坂ダムには周囲に桜の木が植えられ、その新芽を目当てに3月にはウソが飛来します。3月12日にウソを観察に行こうと出かけてみると代わりにレンジャクがいました。レンジャクは桜の木の樹洞に沸く虫を食べていて、さらにクロガネモチの実を交互に食べダムの水を飲みに行くという行動を繰り返していました。このころは連日晴れて春のような陽気が続きポプラの新芽が膨らんできたので、レンジャクは、それもむさぼる様に食べていました。そして、17日にはクロガネモチの実を食べつくして去って行きました。



クロガネモチの実を食べるヒレンジャク

すべて食べつくす勢いで

4月に入ってもレンジャクを見たよと言う連絡が入ってきます。私も買い物に行く際、信号待ちで交差点に止まったら、目の前の街路樹に鳥の鳴き声が聞こえたので見上げてみるとレンジャクが20羽ほど私の車の上を飛び回っていました。ここは自然が豊かと言うには程遠い場所なのに群れています。レンジャクは繁殖地へ向かう際に栄養を蓄えるために木の実や新芽などを食べつくす勢いで移動している様でした。そうしないと、いざ繁殖に入る時に体力が持たないのではないのでしょうか。それほど繁殖は大変なことのようです。